

<CIEC 第 57 回研究会報告>

テーマ：プロジェクト学習を支える教員・協力者ネットワーク

日 時：2005 年 11 月 26 日(土)

会 場：大阪あべの辻調理師専門学校 調理本館

平成 17 年 11 月 26 日(土)大阪あべの辻調理師専門学校において小中高部会企画の研究会が開催されました。開催趣旨として、「プロジェクト学習」を成功させるには、実践者である教員と協力者の人的ネットワークが不可欠であることに注目し、実践例と理論の両面から発表をいただき、CIEC が人的ネットワーク構築の場の提供に貢献できないかを考える、というものでした。

まず初めに、「地域と学校の新たな絆づくりー日本型ネットデイを事例としてー」と題して、和崎宏氏 (NPO 法人はりまスマートスクールプロジェクト理事長)が、持ち前のユーモアを交えて、終始人をひきつけて放さない濃い内容の講演をしていただきました。

そもそも 1994 年に米国サンフランシスコで始まり、その後シリコンバレーを基点として全米に広がった Netday(シリコンバレーにおいては、ハイテク企業などが資金と機材・線材等を用意し、町の電気屋さんや保護者の中のその道のプロがボランティアとして人的支援し、学校内に LAN を構築するべく配線工事一式を行う日)。その日本版を成功させるにあたり、阪神淡路大震災の教訓(非常時には一つのおにぎりを分け合って食べる暖かい心があった)から、平常時にも支えあう地域社会を実現したいという昔の日本人の気持ちをそのまま、Netday の思想につなげられたところが興味深いお話の始まりでした。今日の学校現場を取り巻く多くの要素(行政・教委・地域・企業・保護者)について、「総すくみ環境である」と指摘され、実践者から見た、困難な現実を浮き彫りにされました。

次に、米国の Netday についてきっかけと広がり詳しく説明いただき、まさしく、行政・地域の企業・学校当事者(生徒・教師・保護者)との連携のすばらしさとボランティアの共同体の大きな力を知りました。

和崎氏は、日米の学校や教育に関する環境の違いとして、アメリカは 1)歴史的に学校と地域が深い関わりがある、2) 企業が地域や学校に貢献する意識が高い、3)宗教的にもボランティア精神が高い、などの特徴をあげられ、反面日本で

は、「平等」を建前とする教育行政に Netday は馴染みにくく、さらに行政予算を伴わない実施は困難であるという現実、先導的な事例も数箇所ではあったが、皮肉にも e-Japan 戦略により、公費で校内 LAN 整備の話が出たことが、ブレーキになったと、などの厳しい背景を説明されました。

その上で、いくつもの Netday を企画運営された経験をもとに、重要なポイントや成功の秘訣を具体的にスライドで提示され、どのように計画準備し、仕掛けを作って前日・当日を迎え、当日の運営は本作業の配線工事のみならず、保護者中心の昼食の提供、どこでどのような工事が行われているか、またその進捗状況の情報の公開と共有などをビデオデータで見せていただきました。驚いたことに、その学校はその後どうなったかという報告もあり、次々と第 2 弾・第 3 弾とプログラムが準備されていました。

「参画と協働」という言葉で表現されていましたが、このことは、他の多くのことに応用できることであり、知人を頼るだけではなく、異業種の新たな人間関係を作るなど、いろいろな人が協力することで成功するであろうプロジェクト学習を目指す、小中高部会の関西地区のこれからの活動に大いに参考になりました。また、基本が「自発」であることは仕掛け如何でいかようにも変化することは授業においても重要な鍵であると再認識できました。

二番目に、短い時間でしたが、大木誠一氏 (CIEC 小中高部会世話人・神戸国際大学附属高等学校) が、現在大木氏が中心となって活動が始まった「新しい教育の創造」のための学習会(関西「食」プロジェクト)の内容を紹介され、多くの方の参加を呼びかけられました。

三番目に、「社会変化の担い手としての学校」ー学校と学校外のアクター間での生産的協働のモデルー というテーマで、山住勝広氏 (関西大学人間活動理論研究センター長) に講演をいただきました。

改革という言葉が飽きるほどあふれかえる今日、求められる教師の資質はどのようなものか、学校という場所や学校制度がどのように変わってゆくか、そのなかで、主人公の学生は、どのように考えて進路を決めてゆくのか、という話題から、進路の選択で受験勉強一直線だけでなく、多様な学生を受け入れて、学校を活性化させる、つまり確実に、教育の有り様が変化している。このことは産業構造の転換、例えば機械・電気など、単独ではなく広く相互に関与して

いるということでした。いまや、ワンサイズキッズオールではないことから、子供たちは多様な潜在力を示していて、教師や学校がその多様性に対応していないのではないか？教育は医療と同じであり、その子はこういったライフチャンスをもっているのか、ポテンシャルを広げてやるのが教育であるということも話されていました。

都市において人と人の絆を確認することはできなくなっている、そんな中で若者が力を発揮できる場は何なのか？逸脱することや破壊することで、自己主張する若者が目立つ現代、若者が自分たちの社会に貢献でき、認識できる仕組みが必要であることを強調され、社会環境をよりよくするアクションに関与し、参加できるシステムが必要であるとのことでした。

学びには 2 種類の価値があり、一つはよい成績を得るための交換価値、もう一つは、生活や生きるために役に立つ使用価値である、このために人は学ぶのであり、ゆえに、人間の活動システムとして、コンセプトが大事であり、コンセプトは国境を越え、人々が理解できるものであり、またコンセプトが媒介となり、次の人間の活動が作り出されるということでした。社会的なネットワークをシステムとしてパートナーシップを築き、拡張的学習 *expansive learning* のサイクルを生み出し支援しフォローする、そこで教師同士がバラバラだと、町医者が糖尿病を治療しながら、別の大学病院では勝手に心臓の治療をしているようなもの、という山住氏のたとえに、多様化する学生・社会、それに対応できる教育者・指導者の資質をニュアンスとして感じ取ることができました。

山住氏は、予定時刻を過ぎてまでも熱心に語ってくださり、次々と質問がありました。閉会后まで応えてくださり、聴講者には有意義な両氏の講演でした。学校という場を中心に、どうネットワークを形成できるか？学校の中の教師と生徒が、外のネットワークとどうかかわっていくか？という大きなテーマのもと、今後の別の機会にも論議され、また実践に利用させていただきたいと思いました。最後に、会場としてご協力いただきました、大阪あべの辻調理師専門学校様に、感謝を申し上げます。

文責 辰島裕美／小中高部会